

本学学生の「子ども体力向上事業」への
指導者として参加の事例報告
—— 官学連携による地域の子どもの体力向上
事業を活用したキャリア教育の試み ——

Case report on the participation of Hokusho University's students
as leaders in projects for improving children's physical fitness
—— A new approach for career education utilizing projects for improving children's physical fitness,
organized through collaboration between administration and academia ——

大 宮 真 一*	晴 山 紫 恵 子**	山 本 公 輔***		
Shin-ichi	OMIYA	Shieko HAREYAMA	Kosuke	YAMAMOTO
	竹 田 唯 史****	増 山 尚 美****		
	Tadashi	TAKEDA	Naomi	MASHIYAMA

I はじめに

現在の社会的課題である子どもの体力向上を目的とした研究プロジェクトが江別市と北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターとの連携事業として平成21年度に発足した。平成21年度は、道外の体力向上事業で優れた成果をあげている小学校の視察等を行った。

平成22年度から研究の対象校を近隣の江別市立A小学校に決め、授業開始前の15分間を「朝の運動遊びの時間」として運動プログラムの展開を行った。指導スタッフに研究プロジェクトの本学教員の他に本学学生も加える実施体制を組んだ。若くて新鮮な力が加わることによって事業目的の達成度が高まるとともに、学生が子どもの運動遊びの指導を実体験するという「キャリア教育」の機会を同時に実現する試みの事業とした。

平成22年12月の新卒者の全国平均就職内定率が70%を割ったと報じられ、大学新卒者は就職氷河期以降の後遺症の悪循環に見舞われ、目標を失い閉塞的になっている。北海道の大学・短期大学新卒者にはその傾向が顕著である。

本報告は学生の「キャリアアップ」を図ってこの事態の打開に役するために実施した試みである。

* 北翔大学短期大学部こども学科 ** 北方圏生涯スポーツ研究センター
*** 北翔大学大学院生涯学習学研究所 **** 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

Ⅱ 体力向上プロジェクトの概要

本プロジェクトが関わる「子どもの体力向上」連携事業は江別市立A小学校の2学年と3学年の児童全員を対象として行った。その概要は次のとおりである。

A小学校 体力向上プロジェクト 概要

1. 概要

本プロジェクトは体を動かす遊びを中心とした運動プログラムの指導を通して、運動の楽しさを伝えることを目的としています。そのことによって子どもの生活の運動習慣が促進され、体力・運動能力の向上が図られることとなります。同時にコミュニケーション能力の醸成を図るために伝承遊びや挑戦遊びの形式を取り入れ、生きる力の基礎作りもねらいとしています。たくさん子どもたちが運動の楽しさを味わい、生涯を通じてスポーツを楽しむ人として育つことを願っています。

2. 目標

① 運動・遊び好きの子どもの育成

「汗を流すと気持ちいい」「運動することが楽しい」と感じることでできる子どもの育成を目指します。これにより生活スタイルの中に運動を取り入れ、運動の習慣化の確立をねらいます。

② 基礎的・基本的運動を学び、体力の向上を目指す

様々な動きを体験し、あらゆる運動やスポーツの基礎となる運動を学び、体力の向上を目指します。

③ コミュニケーション能力の向上

仲間とともに運動の場と時間を共有し声を合わせ体を動かしたり、競争して遊ぶことによって、コミュニケーション能力の向上をめざします。

3. 取り組み内容

① 「朝の運動」(仮称)の実施

週1, 2回, 朝15分間, 学生指導員とともに様々な運動を行います。

期間: 6月~12月(夏休み, 10月の学習発表会の練習時は除く)

頻度: 週1回~2回

時間: 8時10分~25分

対象学年: 2年生(10名), 3年生(20名)

運動内容: ・身体を巧みに操作する運動(リズム運動を準備運動に組み込む)

・道具を巧みに操作する運動(ボールを投げたり, フープを使って遊ぶなど)

ダッシュ・ジャンプ(走・跳)系の運動遊び

・歌を歌ったり詩を唱えながら基礎的動作をおこなって遊ぶ

運動指導者：北翔大学学生 5名

②チャレンジコーナーの設置

子どもが日常的に運動することのできる環境や工夫を行い、子どもの向上心や運動意欲を高めます。

例) ・ジャンプでタッチ

天井からカラー紐や紙吹雪・鈴入りのペットボトルなどをぶら下げ、それにジャンプし、タッチする(跳躍力の向上)

・ケンケンパ、ラダー

体育館やワークスペースにケンケンパやラダー(はしご)の印をつけ、子どもが日常的にできるようにします。

・ストラックアウト(的当て)

体育館に子どもが日常的に的当てができるボードの設置

・ジャンピングボード

縄跳びを練習するためのジャンピングボードの設置(屋外)

※ 設置場所の都合などにより実施できないものもあります。

また、上記は基本的に手作りのものを予定しています。

③土曜広場との連携

土曜日広場(月2回)と連携し、希望者に対しエアロビック講習を行います(全学年参加可能)。視聴覚室またはワークスペース。

④夏休み・冬休みカード等の実施

夏休み・冬休みにおいても運動を継続して行ってもらうための意識づけを行う「カード」の作成。また「朝の運動」の出席カードなども作成予定。

⑤体力測定の実施

「文部科学省新体力測定テスト」(4月後半, 12月前半)と、「北翔大学子ども体力テスト(仮)」(6月, 11月, 投力, バランス, ジグザグ走りなど)を実施し, 前後の体力差を検討する。いずれも「朝の運動」の時間を利用して実施。

⑥子どもへの意識調査の実施

運動を実施しての子どもの感想などの意識調査を実施し, プログラム修正の資料を得る。

⑦保護者の情報提供，講演会の実施

保護者へ運動の重要性を理解してもらうための講演会を実施します。

また子どもの運動の様子をプリントなどで家庭へ発信します。

⑧その他

将来的な取り組みとしては，全校で取り組めるようなものに発展させたい。

4. 運動プログラム（案）

本プロジェクトにおける運動プログラムは，下記に示す人間が生きる上で重要となる29種類の基礎的動き（阿江，2009）を，多種多様に経験してもらいたいと考えています。

①日常生活に関わる基礎的動き

立つ（立位姿勢と臥位，座位，椅座位から立つ動き），構える，ものを持つ，掲げる，ものの挙げ下げをする，懸垂をする，歩く，走る，跳ぶ，混合跳（腕+脚），リズムカルな跳，越える，背負う

②生存・危機の場における基礎的動き

転がる，倒立する，よじ登る，降りる，よける，かわす，またぐ，くぐる，這う，跳び降りる，浮く，泳ぐ，飛び込む，投げる

③スポーツに関係する基礎的動き

蹴る，捕る（受ける），打つ，ドリブルする，回る，縄跳び

以上，全29種類

プログラム例

準備運動（リズム運動）：5分 音楽（CD）に合わせて，様々な運動を行います。

- ・子馬・馬（腕支持），めだか（くねる），とんぼ（動から静止），ワニ（這う）
- ・どんぐり（転がる），ゆりかご（揺れる），ブリッジ（反る），だるま（転がる）
- ・ギャロップ，スキップ（リズムよく跳ねる）

○集団遊び（全体）

（1）走運動

- ・増やし鬼
- ・転がしドッジボール【+投】
- ・引っ越し鬼
- ・しっぽ取り

（2）跳運動

- ・大縄：郵便屋さん

- ・はじめの一步
- (3) 投運動
 - ・ドッジボール
- (4) 伝承遊び
 - ・わらべ歌, ケン・ケン・パ

Ⅲ 学生の本プロジェクトへの参加状況

1. 学生指導者の募集方法

下記のような取り組み内容を示し、「子どもの体力向上事業」としてA小学校で実施する「朝の運動」に参加する学生スタッフを募集した。

- ① こどもの体力の著しい低下を示す社会問題を解決する活動に参加し、現状を把握する。
- ② こどもの体力向上を目的とした運動プログラム開発に参加する。
- ③ こどもの体力向上プログラムの指導者の一員として「朝の運動」に参加する。
- ④ 体力測定の実施を通して体力向上を目的とした運動プログラムの効果の検証を学ぶ。

2. 学生の参加状況

北翔大学生涯学習システム学部健康プランニング学科 3名

北翔大学短期大学部こども学科 17名

北翔大学大学院生涯学習学研究科 1名

指導スタッフとして参加を希望した学生は本プロジェクト教員が当初予想していた人数をはるかに超えた。6月～12月の長期にわたり、週2回の実施では、多人数の参加希望学生の応募は本学学生の意欲の潜在性の反映に他ならないものであると判断する。

実際の指導においては、期間の前半・後半に実施した体力測定時には指導者に応募した学生ほぼ全員が参加し、運動プログラム指導においては1回につき5名前後の学生で指導を行った。運動プログラム指導時における学生は、1名がプログラム内容の説明を中心的に行うメイン指導者となり、他の学生は個々の児童へ補足説明等を行うサブ指導者の役割を担った。これらの役割をローテーションで行い、指導者に応募した学生のほぼ全員が1度はメイン指導者を経験できるよう配慮した。プログラムの指導に当たっては、毎回学生が中心となってプログラム内容を検討した後に指導計画を立案し、教材づくりの事前準備を行った。実施後は、毎回「振り返り」を行い、学生が一人ずつ反省点や課題を述べ、次のプログラムに活かすようにした。

期間の前半である夏休み前まで、指導に当たった学生は児童へのプログラム内容の説明時間が長く、児童の活動時間が短くなる等の課題が多くみられた。この課題をもとにして、事前準備の徹底や子どもが興味を持って生き生きと取り組むことができる教材研究を繰り返し行うことにより、夏休み後のプログラムでは的を得た短い説明や活動時間を確保することができるよ

うになり、子どもたちはより一生懸命に、より楽しそうにプログラムに取り組む様子がみられた。また、プログラム開始当初は、サブ指導者がどのような役割や動きを行えばよいかということを理解できない場面が多くみられた。しかし、期間の後半では、サブ指導員自身が「今、何をしたらよいか」「メイン指導者はサブ指導者に何を求めているのか」等について、学生が自ら考え、そして行動できる様子がみられた。このような過程を通して、学生は指導を行う際の方法や児童との関わり方など、多くのことを学び、成長した様子がみられた。

IV 学生指導者の参加後のアンケート結果

1. 質問内容および記述結果

① 学生指導者に応募した理由

- ・子どもと関わることを積極的にしたいと思ったから。
- ・体力低下が問題になっている中で、現代の小学生がどのくらい体力があるのか知りたかったから。小学生との貴重な交流に参加したかったから。
- ・子どもと関わる機会が実習でしかないため、少しでも増やそうと思ったから。
- ・指導者としての経験を積みたいと思ったから。
- ・子どもと関わる機会を増やしたかったのと、運動の指導をしたかったから。
- ・これからの自分の将来のために良い経験ができたと思ったから。
- ・ボランティア活動がもともと好きで、今回は小学校を経験したと思ったから。体を動かすことが好きで、体育に力を入れる幼稚園に就きたかったので応募した。たくさん子どもとふれあう機会が欲しかったから。
- ・指導力を身につけたいから。今の小学生の体力はどれくらいあるのかを知りたいから。
- ・小学校教諭を目指しているので、直接小学校の児童と関わりを持てるチャンスだと思ったから。自分の指導案を試したり、他の人の指導を見ることができるから。
- ・子どもたちと関わる機会が欲しかったから。様々な経験をして、自分の力を向上させたかったから。
- ・少しでも多くの子どもたちと関わりたいと思ったのが一番の理由。また、子どもとの関わりの中で、子どもたちの様々な姿を見ながら、指導内容や指導の仕方、声かけなど実践を通して学びたいと思ったから。
- ・ボランティアの経験が少なく、いろいろな経験をして、就職に生かしたいと思ったのが理由。さらに、このボランティアは子どもを相手に指導者として行うものなので、これからはつながると思い応募した。子どもと触れ合うきっかけにもなると思った。
- ・ボランティアをやったことがなかったから。
- ・子どもたちの活動の様子など自分の経験を増やし、指導力向上のため。
- ・教員を目指しているので、指導方法を学びたいと思い、応募した。
- ・子どもへのスポーツ指導に興味があったため。

上記の応募の理由を整理してみると、

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| a. 子どもとのふれあいを求める（10件） | b. 子どもの能力の実態を知る（4件） |
| c. 指導力の向上（9件） | d. 将来のためになる（1件） |
| e. ボランティアとして（1件） | |

であり、応募した過半数の学生は子どもとの触れ合いを求めており、4割近くが指導実践を積んで指導力を高めたいと考えての応募であったことがみえてきた。

② 応募時点の心境

- | | | | |
|--------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. かなり期待していた | <u>2名</u> | 2. 少し期待していた | <u>3名</u> |
| 3. 少し不安だった | <u>9名</u> | 4. かなり不安だった | <u>2名</u> |

回答番号と具体的な理由は？

- ・ 3 小学生が自分たちにどのように接してくれるかわからなかったから。きちんと指導できるか（伝えられるか）不安だった。
- ・ 2 どんなことをするのか流れがあまりわからない状態で指導をしに行ったから（初めての経験だった）。小学生との交流が楽しみだったから。
- ・ 4 指導すること自体、自信がなかった上にまず子どもとどう関わろうか不安だった。
- ・ 3 どんな子どもたちがいるのか、2・3年生はどんな学年なのかわからなかったから。
- ・ 3 小学生との関わりが少なく、どこまでの運動ができるのかわからなかったから。
- ・ 3 小学生と接する機会がないので、どのような子どもたちなのか、上手に接することができるか不安だったから。
- ・ 1 実習などでは、3～5歳の園児しか相手をしていなかったもので、今の小学生はきっと大きいだろうな！と思っていました。園児とは違う楽しさ・明るさ・元気に期待していました。
- ・ 4 まだ先生でもないもので、反抗されるのではないかと思っていた。
- ・ 1 子どもと接することは大好きだし、体を動かすことも好きだったので、楽しく活動できると思ったから。
- ・ 3 まだ実習前だったので子どもたちと関わることに戸惑ってしまうから。
- ・ 3 子どもたちと接することに対して、不安はありませんでしたが、指導するという中で上手くできるか、子どもたちは楽しんでくれるかなどの不安は少しあった。
- ・ 3 子どもは大好きですが、実際にどう触れ合うか、どうやって遊ぶか考えると少し不安もありました。仲良くなるにはどうすれば良いかとたくさん事を考えていました。どのように伝えたら子どもに伝わるか考えることで精一杯になっていた。
- ・ 3 小学校の免許を取るための授業を受講していなかったもので、どのようにしていいのか不安だったのと、どのような子がいるのかという気持ちだった。
- ・ 3 実習では保育園と幼稚園など幼児としか関わることがないので、児童とどう関わり、接していい

のかわからなかったから。

- ・ 2 心配な部分（自分が緊張してしまうなど）もあったが、子どもたちと楽しく活動することができるか、どんな子どもたちかなと少し期待していた。
- ・ 2 子どもたちの楽しむ姿や、これからの指導について楽しみだったため。

応募時点の学生の心境については12月の指導が終了してからの調査であるため具体的に書かれた文章から期待と不安の入り混じる心境が見えてくるが、「不安」は「期待」を大きく上回る状況の中での応募であったことが窺える。

③ 今回の指導回数の満足度

1. 非常に多かった 0名 2. 多かった 1名 3. 適当であった 12名
 4. 少なかった 2名 5. 非常に少なかった 0名 回答なし 1名

回答番号となぜそのように思ったか？

- ・ 3 週に2回という回数があったので、体力測定以外のこともいろいろとできてよかったと思う。
- ・ 3 行けない時もあったが、体力の増進がみれたようなのでよかったかなと思う。
- ・ 2 長期的なプロジェクトだったため。
- ・ 3 週2回というのは指導しやすかった。しかし、子どもの体力を向上させるためなら「月・水・金」のように週3回くらいでも良かったと思う。
- ・ 4 朝の短い時間しかないので、測定で2、3回使わなければならないので少し足りないと思う。
- ・ 3 最初は「長いな」と思っていたけれど、終わった今はあっという間だったと思う。4月～12月なので期間は長いですが、もっともっと子どもと関わりたかったので、今は少ないな…と思う。
- ・ 3 子どもに体的に。
- ・ 3 自分の指導した後、人の指導を見たりできたので、自分と人の指導方法の違いを見たり、反省する時間に『自分ならこの時こうする』など考え、整理しながらできたから。
- ・ 3 子どもたちとコミュニケーションも取れ、仲良くなれたので適当であったと思う。
- ・ 3 前期・後期に分かれていて、私は後期の（金）担当というだったが、火・金関係なく参加したので、私にとっては適当な回数でした。様々な活動内容を見ることができました。もし、後期の金だけだったら、少なかったように思います。
- ・ 4 私は、行ける日はなるべく行くようにし、経験を積もうと努力したと思っている。しかし、実際に自分が指導するとなるととても緊張するので消極的になってしまいました。もっともっと、積極的にメイン指導者をすべきだったかなと思った。
- ・ 3 最初と最後に測定を行い、子どもたちの体力が上がっていたので、継続して行うことに意味があると思った。
- ・ 3 メインとしての回数はもう少し経験したほうが良かったと思うが、測定では毎回子どもたちに声

かけをし、促すことができたので良かったと思う。

- 3 忙しい時期はあまり参加できなかったが、他の人の指導を見ることもできたから。
- 3 朝が早いので実家から通うとなると多いし、つらい。

学生指導者の75%は「適当であった」と感じているようであるが、自身にとっての指導回数
の適否に答えながら一部児童にとっての視点での回答もみられる。

④ 今回の指導（メイン or サブ）者の経験が今後、教員や保育者を目指す上で参考になっ
たか。

1. 全て参考になる 13名 2. 場面によっては参考になる 3名
3. あまり参考にならない 0名 4. 全く参考にならない 0名 5. わからない 0名

回答番号とどのようなところが？

- 2 子どもの気持ちを高めることの大切さや指導・説明の順番などを学ぶことができた。現場に出た時、今回の経験を生かしていきたい。
- 1 メイン指導者になったのが少なかったが、まとめることの大変さを実感できたので今後の参考になった。
- 1 子どもと接することになかなか機会のない中で参考にならないことはなかった。
- 1 子どもたちの注目を集めることや道具に少し工夫することで遊びや活動の幅が膨らむと知ったから。
- 1 遊びを通して運動することの楽しさ、体の動かし方の指導をすることの大切さを学びました。
- 1 どのように接すると良いか、子どもたちによりわかりやすく説明すること。子どもたちが集中できるようにすること。信頼関係をどのように築くのかなどということ。
- 1 メイン指導では、子どもを集中させ、メリハリをつけて楽しく活動することを学びました。もっと大事なことは、サブの指導者が周りをよく見て、メイン指導者のサポートをすること。どんな時でも相手のことを考えて動く大切さを学んだ。
- 1 自分の指導でこれからやっていけるのか不安。
- 1 小学校の教育実習で算数の授業がTTで行われていたことや、先生方が協力して行う運動会などを経験し、メイン・サブ指導者をはっきりさせ、メインなら全体を指揮する、サブなら補助的に個人に関わるなど、分担する大切さも教員・保育士は必要なことと思うから参考となった。
- 1 子どもたちの引きつけ方や、説明の仕方など、学ぶことができた。また、周りを見て行動することを学んだ。
- 1 子どもへの声のかけ方や対応の仕方など、子どもとの関わり方についてとても多く学びました。子どもがどんな動きや反応をするのか、どんな活動や工夫ができるのか、またメイン指導を通して説明の仕方、立ち位置についても。
- 1 メインの場合は、毎日の保育の活動につながると思う。どのように子どもに活動を伝えるか、子

どもの様子を見ながら活動を勧めるなど、とても勉強になった。サブの時は、メインの指導者が何を伝えたいのかしっかりと把握し、サポートすることが大切だと思った。また、いろいろな指導方法を見ることで勉強になった。

- 2 メインは全体をまとめ、サブはメインの人の補助を行うという、メインとサブの違いもわかり、その時の場面で使い分けられる。
- 1 保育者となって、メインとしての全体を見て効率よく進めることや、サブとして全体を見て補助や個人への対応など、とても参考になった。
- 2 1つの活動につき、どのくらいの時間で子どもたちは飽きてしまうか、決められた時間の中でのような活動にするかなど対象とする年齢は違ったが参考になった。
- 1 他の人の指導を多く見て学べたので、自分では気づかない点や指導方法を学ぶ上での大切なことを身をもって経験できた。

子どもとの関わり方、説明の仕方、メインとサブの役割などを理解し、多くのことを学んだといえる。

⑤ メイン指導者を経験して指導や支援の考え方やイメージが変化したか

1. 大いに変わった 2名 2. ある程度変わった 8名
 3. あまり変わらなかった 0名 4. ほとんど変わらなかった 0名 5. わからない 5名
 回答なし 1名

回答番号と具体的な理由は？

- 2 難しいことを長々と言うのではなく、簡単に短く伝えることが大切だと思う。
- 1 子どもの気持ちを上げることで流れに乗ってくれるということがわかった。
- 5 経験していないため。
- 5 メイン指導者を経験していないから。
- 5 メイン指導者になっていない。
- 2 思った以上に説明することが難しく、言葉がけの難しさと大切さを知った。
- 2 良いことをしたら誉めること、リアクションは大きくとると良いと思った。また、淡々と進めず、少し面白くすると、子どもの心はつかめることがわかった。
- 5 回答なし
- 1 サブをしている時は深く考えずできることをしていたが、メインをすることでサブが「こういうふうに動いてくれたなぁ」と考えるようになり、他の人がメインをしている時はこうするとスムーズに進むかなと考えて行動することができた（メインをしていない人にはわからないことが積極的にできた）。
- 2 長く説明してやり方を理解させてから活動するよりも、短くわかりやすく説明をし、長い時間活

動することが子どもにとって楽しいものになると知った。

- 2 子どものどんな面を育てたいのかというねらいを明確にすること、説明はより短く簡潔にし、いかに子どもの運動量を確保できるかが大切だと感じた。
- 2 子どもたちが上手くできるように教え込むのではなく、子どもたちが活動の中から自分たちでコツや上手にできる方法をつかみとる、感じることが大切で、それができるように支援することが大切だと学んだ。
- 5 メイン指導者をやっていない。
- 2 メイン指導者をして、指導する子どもによって指導の仕方を変えたり、自ら全力で行うなど以前よりも細かい指導の部分についての考え方が変わったと思う。
- 2 自分も楽しみながら指導することが大切だと感じた。説明より見本を見せることが大事である。

回答からメイン指導者を経験することが単独の指導力を高める効果以外に他の指導者に対するサポートの仕方も学び総合的な指導力・教育力が高まっていることがわかる。

⑥ 指導プログラムについて今後活用できそうか

1. 大いに活用できそう 8名 2. ある程度なら活用できそう 7名
 3. あまり活用できそうにない 0名 4. 全く活用できそうにない 0名 5. 無回答 1名

回答番号と理由

- 2 年齢差や個人の体力を考え、活動することが大切とわかったが、まだ自分だけで指導できるか自信がない。
- 2 保育園希望なのであまり活用できないかなと思うが、工夫していきたい。
- 2 運動に対して、ねらいなど考えることがなかったので参考になった。
- 2 私は認定こども園に就職するので保育があるのかわからないし、年齢が違うので少し工夫を入れたりしながら活動しなければいけないから。
- 1 幼稚園教諭になるため、遊びを通しての体力づくりは日々の活動が行われるから。
- 1 子どもたちと体を動かすことで、それを今後自分も取り入れ、楽しめるように工夫できると思ったから。
- 1 フラフープやマットを使うなど、身近な物のできるので、是非活用する。園児には小学校入学前にいろいろな運動を経験してもらいたい！と思う。
- 5 回答なし
- 1 実際に子どもに指導しているので、『あの時もこんな子がいたなぁ』と思い出し、対応できたり、今のクラスにこの遊びをしてみたいと思えると思うから、少し時間が余った時、ゲーム感覚で遊びや運動を楽しむ時間に変えることができるため。
- 1 指導プログラムでは、投・走などわかれていたので目的にあわせた指導を考えられると思う。

- 2 小学校の体育館のような大きなスペースがある保育園ではないが、私の就職する保育園でもできそうな活動は多くあったので、是非今後活用したいと思う。
- 1 遊びを通して体力を向上するというとても楽しいプログラムなのでもっと年齢が低い幼児でも大いに活用できると思う。
- 2 最初からいきないメインのことをやるのではなく、基礎から行っていくことが大切だということがわかった。
- 1 幼児に対しては、もう少し簡単に変わると活用できると思う。今回行ったプログラムのおかげで指導する際、ねらいや子どもの活動について計画がたてやすくなると思う。
- 1 短い時間の中で、子どもたちをたくさん動かせるプログラムがたくさんあった。
- 2 その日の子どもの雰囲気などで臨機応変に対応するのは、もう少し経験をかさねてできるようにになりたい。

回答の時点で就職内定者が17名中12名である。また希望の職業は保育士8名、幼稚園教諭5名、小・中・高等学校教諭2名、その他2名であることから考えると教育・保育のどの分野であっても学生は役に立つ体験であると感じているようである。

⑦ 大学院生（子どもの運動指導経験者＝社会人）の指導を見て参考になったこと

- 子どもたちへの説明の仕方、1つ1つの動作を育てるための運動内容など、子どもが興味を示すもののポイントをつかんで指導していたところ。
- 大きな声で子ども目線で話しているところ。わかりやすく簡潔に話すところ。
- 子どもたちの活動を盛り上げるような声かけや子どもたちを注目させたり、集中させたりする技術。場面や時間に応じて対応すること。
- 子どもたちを注目させる方法。その時の子どもの動きに合わせてプログラムを変えていくことができることを学んだ。
- 子どもたちの集め方、集中してもらおうようにどのようにするのか、言葉かけなど参考になった。
- テンポの良さが私たちと違っていた。説明も短く、活動量も多く、朝の時間を有効に活用していると感じた。
- 私は、説明することや必要な言葉を要約することが苦手でした。〇〇〇〇さんの説明や言葉かけは的を得たものだったので勉強になった。個人を見て、集団も見ることは難しかったが、〇〇〇〇さんの立ち位置や話しかけるタイミングを見て、少しずつわかってきた。
- まず、子どもたちのひきつけ方が上手で、子どもは生き生きとしていた。その日、その状況に応じて変更したり、活動を増やしたりなど、臨機応変に指導することが大変参考になった。
- 子どもへの声のかけ方はもちろんのこと、指導する際の説明の仕方、配置、活動の展開など様々なことが参考となった。その活動には、どのようなねらいがあるのか、またどのような理由で活動を

行っているのか、活動の広げ方（工夫の仕方）があるのか、とても勉強になった。

- ・ 子どもたちの前に出ると人が変わったようになるところがすごいと思った。子どもたちが楽しく活動できるよう、指導者が明るく元気よく子どもの前に立って話すことが大切だと思った。また、子どもにわかる言葉、表現を使って説明をすることが大切だと学んだ。
- ・ 始まりから終わりまでの流れや切り換え、子どもたちをひきつけ、集中させることなどとても参考になった。いかに自分が動いて、子どもたちに興味を持たせ自ら動きを楽しむことなどがとても大切だとわかった。
- ・ とにかく楽しめる指導だったと感じた。子どもたちをたくさん動かすこと、説明は短くすることなど、勉強になった。
- ・ 子どものモチベーションをあげる方法や、説明をわかりやすく短くし、活動量を増やすことなど。

上記の大学院生の指導を見て、参考となったことについて

- a. 子どもへの説明の仕方（10件） b. 子どもの興味の引き出し方・盛り上げ方（8件）
 - c. プログラム（細案）の立案（3件） d. 運動量の確保の方法（3件）
 - e. 各基本運動の指導のポイント（2件） f. 臨機応変な指導の重要性と方法（2件）
- a. ～f. の項目に要約できる内容を一人でいくつも参考にしていることが分かり、身近に具体的なモデルが必要であることがわかる。

⑧ 学生指導者を経験して得たこと

- ・ 指導を何ヶ月も続け、最後には子どもとの絆が少し築けていたと思う。長い期間接すること、関わりを大切にすることを学んだ。また、運動能力の年齢差を見ることができた。指導をしてみて、子どもと接することがもっとうまくなりたいと思った。
- ・ 子どもの運動能力増進方法、指導方法。
- ・ 子どもたちが楽しく活動することで体力もつき、次回を楽しみにしながら活動に参加する気持ちが大切で、それ指導者の声かけや活動計画の組み方でそれを盛り上げることができるということ。子どもたちの素直さや可愛さを感じた。子どもに関わる仕事に就きたいと思った。
- ・ 子どもとの関わり方、信頼関係の大切さを学んだ。子どもの動きを見て常に自分が何ができるか考え行動することが大切だと感じた。
- ・ 担当した子どもたちと毎回楽しみながら接して、子どもたちの色々な姿をみることで良かった。子どもたちにどのように説明し、どんな流れで行うのか、どのように集中させると良いかなど得ることができた。長い間、一緒にいて子どもたちとの信頼関係が築くことができて、とても良かった。
- ・ 子どもは体を動かすことが好きだ、と改めて気づいた。苦手な子も、周りの子と一緒にになると、やっぱり楽しそうだったし、きっかけがつかめないだけなので、指導者が理解し対応することが重要だと学んだ。園児と比べ、小学生は大人かな…？と思っていたが、みんなまだまだ子どもらしく、と

でも可愛かった。満足した！

- 指導案を自分で立て、それを実行すると、自分の考えでは足りないことがわかったり、学年で説明方法を変えると伝わることなど、細かな指導内容をするのができたことは、とても良い経験だった。学生同士で力を合わせるこの大切さや、メイン指導をどう支えるかなど現場で必要なことが少し身についたように思う。
- 子どもたちと本気で向き合うことで子どもたちも真剣にやってくれたり、楽しそうに活動してくれた。私たちが手を抜かず一生懸命にすることが大切だと学んだ。また、簡単でわかりやすい説明の仕方や子どもたちのひきつけ方など技術的なことも学ぶことができた。
- メインの指導の大変さやサブ指導員の重要性、役割などを感じるとともに、指導するにあたっての注意点、工夫等多くのことを学ぶことができた。子どもたちとの関わりを通して、多くの子どもの姿を見ることもできたし、子どもとの信頼関係もでき、改めて子どもとの関わる仕事のやりがいを感じた。
- 子どもの前に出て活動を伝えたり、一緒になって活動することがとても楽しいという気持ちがさらに向上した。最後の測定では、子どもたちの記録が伸びていることに驚き、うれしく思ったが、それ以上に子どもたちが毎朝楽しそうに嬉しそうに体育館にきて活動していたことがとても心に残っている。
- 基礎からやっていき、最終的にメインまでつなげていくことが大切だと思った。また、運動を続けることで体力もアップすることがわかり、体を動かすことは大切だということがわかった。
- 全体を見て動いたり、色々な指導の仕方、子どもたちの様子、一つの活動から得られること、さらにその発展させた活動の多くのことを得ることができた。
- 人を動かすことの難しさや、子どもたちへの言葉遣いなどを学んだ。まずは見本!!そして、説明が大切だと感じた。
- 子どもに指導をさせていただくチャンスがあまりないので、一つ一つが全て身になった。特にその日の子どもの様子でプログラムを変えることや、自分がすべきことなど、臨機応変に対応するということが大切だと感じた。

上記の「指導経験を通して学んだこと」を整理してみると、

- a. 子どもとの絆（人間関係）の大切さ（5件）
- b. 運動能力の年齢差の実態を知った（2件）
- c. 指導力の向上に対する意欲（11件）
- d. 指導者の子どもの理解の重要性（8件）
- e. アシスタントの役割（2件）ほか項目を整理しきれないほど多岐にわたっている。

2. アンケート結果の考察

学生指導者に応募した理由の「子どもとのふれあいを求める」（10件）「子どもの能力の実態を知る」（4件）「指導力の向上」（9件） d. 将来のためのなる（1件）を体力測定と運動プログラムの指導の体験を通してほぼ実現したことがアンケートの②～⑧項目の回答から読み

取れる。特に「子どもとのふれあいを求める」については最終指導の終了時には子どもたちから感謝の手紙が一人一人に渡されたことから大きな絆を築いた経験であったと言える。「子どもの能力の実態を知る」と「指導力の向上」についてもメインの指導者やサブの指導者の経験を通し指導や支援の仕方の考え方やイメージが変わり、参考になる体験や活用できる経験を積んだと答えている。

V こどもの体力向上に関するその他の事業への参加について

本プロジェクトへの参加以外にも札幌市の子ども体力向上事業（文部科学省助成金対象事業）である「げんきキッズ」教室が10区の各体育館で展開されている。この教室のサブ指導員としてこどもの運動指導の経験を積んでいる学生もおり、当教室が主催する短期教室（夏休み教室・冬休み教室）は学生指導員がメイン指導者として指導キャリアを積むことができる場となっており、さらに指導の前には指導案作成から評価までのミーティングの機会も用意されており、本学教員も指導者養成のメンバーとして参加している。

1. 学生指導員として参加している学生数と配置

a. げんきキッズ（通年20回）

厚別区：3名，白石区：3名，手稲区：2名，西区：1名，豊平区：1名

b. 短期げんきキッズ

夏休みげんきキッズ 5名

冬休みげんきキッズ 6名

VI ま と め

上記取り組みが実現できたのは、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターの研究プロジェクト教員による生涯スポーツ学部スポーツ教育学科（健康プランニング学科を含む）と短期大学部子ども学科の学生への働きかけや指導がされたことによる。また子ども学科は平成22年度入学生まで専修制（音楽・美術・体育）のクラス編成がなされていたこと、少数ではあるが他の子どもの体力向上の事業への参加事例を有していたこと等もその一因となった。

この取り組みを通し、学生は実際の指導現場を長期間にわたって体験でき、卒業後の就職先で活かすことのできる多くのことを学んだといえる。この様な専門教育分野と結びついた「キャリア教育」の重要性を確認することができた。社会の要望に応え得る人材を育成し輩出することが厳しい就職状況を打開する命題である。現代社会が抱える課題に積極的に取り組む意欲を育て、課題を解決する方法を実体験を通して身につける機会を増やすことが現在の学生への自信の醸成にもつながり、「キャリア教育」の拡大の一助ともなるだろう。

文 献

阿江通良（2009）幼児の動きの発達にはさらに何が必要かー日本体育協会「幼少年期に身に

つけておくべき基礎的動きプロジェクト」から－. 体育の科学59(5), 317-323.

謝 辞

江別市立文京台小学校校長の島田茂先生をはじめ、関係教職員の方々、対象児童と保護者の皆様のご理解に深謝申し上げます。

付 記

本研究は、平成22年度江別市教育委員会から研究委託事業によって行われたものである。



握力の測定



子どもたちと学生指導者①



ジャンプして輪にタッチ



壁に向かってダッシュ!!



ゴールにねらって投げる



ジャンプして届くかな?



またぎ越しくぐりの測定



子どもたちと学生指導者②